

中国民居研究—客家の方形・環形土楼について—(梗概)

茂木計一郎

はじめに

東京芸術大学建築科茂木研究室・デザイン科稲次研究室の中国住宅建築研究は、先の「徽州民居」につづいて今回は福建省西部における「客家土楼」を研究対象にとり上げた。特異な大型集合住宅の存在は知られていたが、この地区はまだ外国人に解放されていない。1986年4月、現地にも滞在して調査を行った。客家民居は調査地以外にも散在している。また調査期間も少なかったため今回の報告はその一端にすぎない。梗概では客家土楼の図面表示を主とし、研究報告書の内容を末尾に示す。

客家について

客家(ハツカ)は漢語の一方言である客家語を話す漢族の一系である。その居住地は広東・福建・江西省境地域また広西・湖南・四川省の一部さらに台湾にある。居住地の多くは交通不便な山間部である。

客家の人々はその名が示すように先住者に対して後に移住して来た“客”である。客家は古い時代から中原より南下し山地に周辺の人々より隔絶して住みついで来た過程において、古来の漢族の文化を保持して来たとともにその実態について広く知られることもなかった。

客家は4～5世紀東晋の頃、南下をはじめ次いで唐末に動き12～14世紀宋代において三省境地域の現住地にほぼ定着した。明末清初そこよりさらに中国奥地また台湾に広まった。清末各地に斗争により動きがあった。客家はこのように数段階にわたり遷移南下した。客家人口が大半を占める居住県は広東省に15、江西省に10、福建省に8であり、今回の調査地福建省永定県もこの中に入る。客家人口は約3500万人といわれ、中国本土・台湾・海外に分布するが、三省境地域には60%が居住している。この付近は温帯に属する内陸山間地である。3～600mの低山が重畳し平地は少い。雨も多く台風もあり、むし暑い季節も続く。

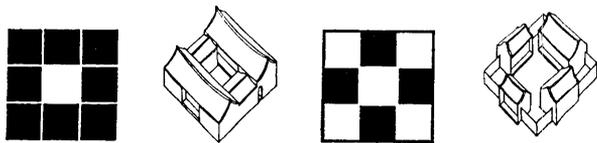
客家の人々は古くから移住を繰返し今日でも華僑として発展している。遷移の原因は異民族の進入、先住者の圧迫、土匪の横行によりつねに貧困・差別・不定に悩まされ安住を外に求めるとともに、中原出身の宗族を誇りとして集団労働・共同防衛の強固な社会体制を内に求めつづけた客家の特性によることが多い。

客家の家族制度

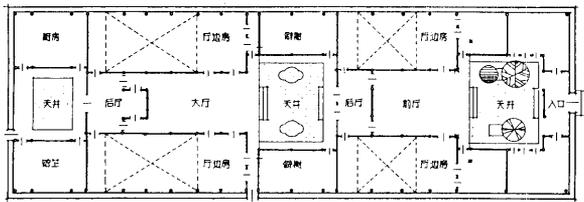
数世同堂の大家族制度は中国に多く見られる慣習制度であったが、この客家の人たちほど貧富を問わず多子多孫をもって幸福とし共同し合う家族観念に富んだ大家族制を保持して来たものはなかったと思われる。一族の祭祀をまつり外敵をふせぎ貧しい山地に生きるために集住し、さらには弱者を扶養し子弟を教育し財を外にもとめるために客家の大家族はいわば小さな国家を維持することでもあった。事実客家は同一家族内にあって農・工・商・学・兵などの種々の業務につくものがあつた。もとより主要な仕事は農業である。共同所有していた相応の土地の耕作はほとんど女性の仕事であった。封建的礼教が強く支配していた当時、男尊女卑は徹底し男子は生れながらに優遇され、進学・任官・実業・軍事などの道につくことを良しとされた。能力ある男子は外に出て名を成し財を蓄え家郷を顧みて繁栄を願った。客家の大家族はこのように複数の家業の組合せを包含して多様な状況に即応できる組成を持っていたと思われる。そして家長は絶対権力をもって内を統率し代表して外に対処した。家族が増大し堂に満ちても分裂することもなく周辺に力を保持することが務めであった。

客家は中原より出た漢族であるという自負—中原崇正の理念は、その大家族を強固に維持して来た真情である。強く団結し閉じて保持して来た生活や文化は、決して華南固有の周辺文化の影響を受けてないとはいえないが、しかし中原に根づく漢族の伝統的文化を受け継ぐとともに、長い遷移の過程に積み重ねられた独自の文化を形成して来たと考えられる。客家大家族の生活習俗—衣食住においてその個有性がいろいろみとめられるが、とくにその住居の規模・形態・構造について類のない特異性を示すものである。中国住居の典型である四合院形式を維持し華南の風土に生まれた建築的性格を加味し、客家の背負う宿命の表われとしての独自の形式を山間の僻地に見出して来たのである。

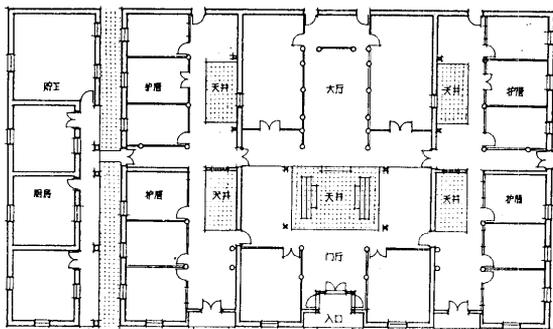
客家の大家族制は封建時代において成立されたものであり、現在の中国では当然解体され独立生計の大家族の集合体を成立させている。今日の農業政策や経済力の下では急速に状況が変貌するとは思えないが、少なくとも客家土楼が新たに建設される機会はないと考えられる。



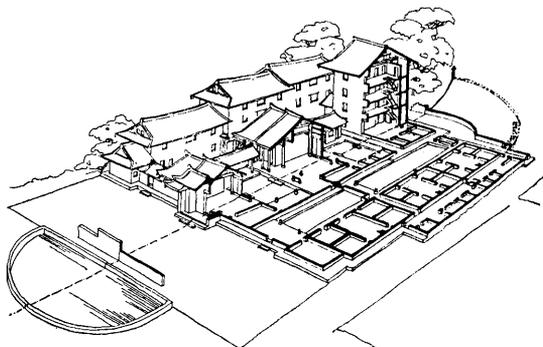
九室式〈天井〉と五室式〈院子〉概念図



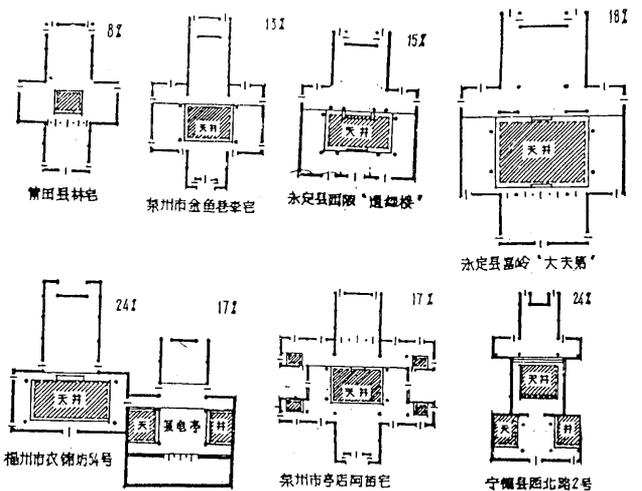
福建民居 縦向多進式



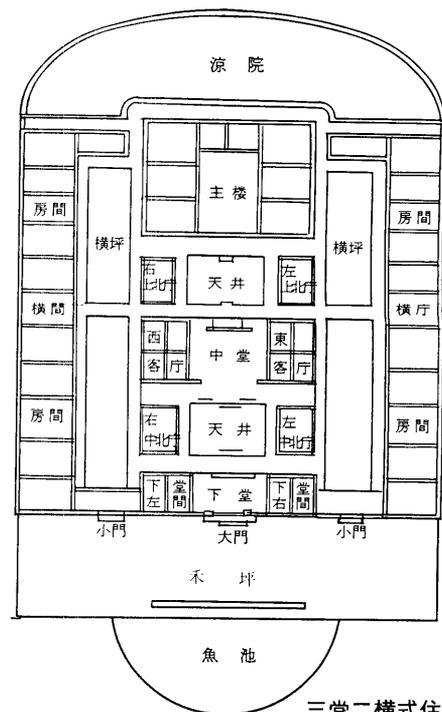
福建民居 横向横屋式



三堂二横式〈大夫第〉断面鳥瞰図



各種の〈天井〉空間



三堂二横式住居説明図

福建民居の概要

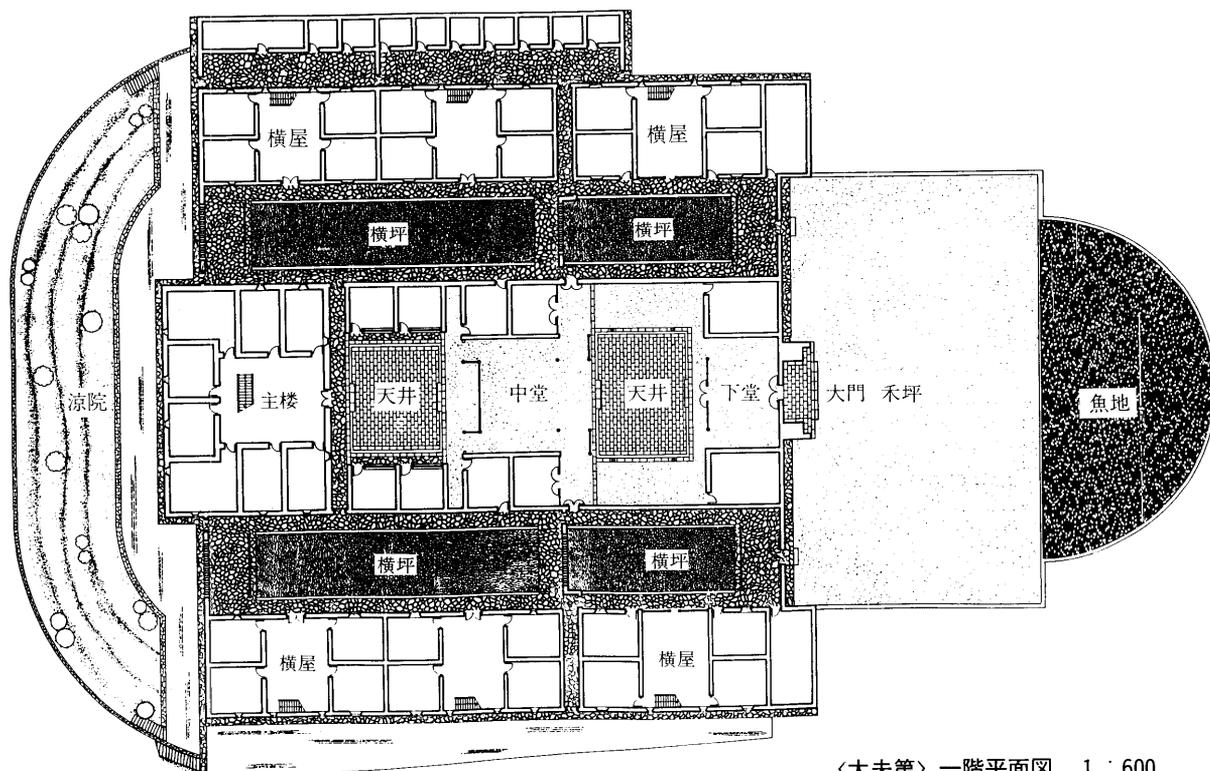
福建省の別名を「閩」という。福建第一の大河閩江に因み、それを中心として四地域に分けられる。閩東・閩南は海に面し一連の平野部をもち古くから海運が栄え発展した地域で、石や磚による華南の伝統的建築が多い。閩北・閩西はすべて山間部にあり交通不便である。森林は少く耕して山頂に至る水田が多い。生土と木材による建築が見られる。四つの地域に分かれその風土地形に対応した住居建築が展開しているが、客家土楼は閩西にあってもまた特異な存在である。

福建民居は地域的区分とは別に伝統的・華僑式・自由式の三形式に分けることもできる。華僑式は華僑から送られた資金によるもので伝統的と植民地的西欧式の混合した濃厚華麗な外観を示している。自由式は解放後農民たちが身近かな材料で建てているもので一定の形式もな

く小さく貧弱である。しかし伝統的形式がそのまま建てられることはなく自由式・華僑式が今後広まると思う。しかしここでは伝統的形式について若干触れたい。

〈院子〉^{ユワンズ}と〈天井〉^{テイエンチン}

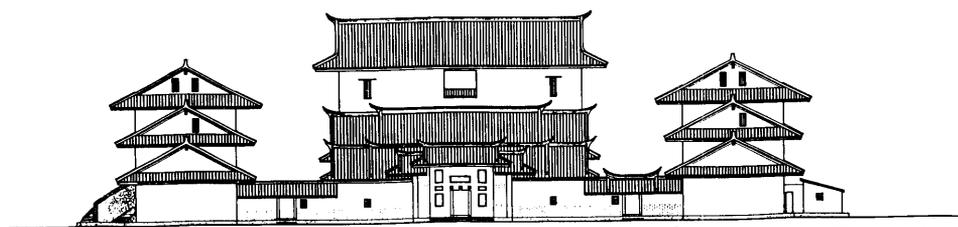
伝統的福建民居において外壁を囲み中軸線上に中庭を置き堂屋を配する形式は、中国住居の典型である四合院形式と共通している。しかしその中庭のあり方に南北の相異がある。四合院において中庭である〈院子〉を中心にして四方に平家の建物を配し、陽のあたる空間を広く設けようとする形式に対し、福建民居では中庭というより光庭として〈天井〉を中心にして四周に庁堂など高い建物を置く形式が好まれている。五室式・九室式という説明もできるが、〈院子〉は四つの建物の間にあり〈天井〉は一つの建物の中にあるということもできる。これは緯度の相異による受熱量の調整に起因するものである。福



〈大夫第〉一階平面図 1 : 600



〈大夫第〉断面図 1 : 600



〈大天第〉断面図 1 : 600

建民居において中心的な厅堂は天井に開かれ一帯の空間を形成し、そこは一家の公式的行事の場ともなり日常生活の中心ともなっている。このような天井空間は長江以南に多く見られるが、福建民居ではさらに大小の天井を設け大家族の生活に対応した多様な〈天井〉空間をつくり出すことが巧みである。

縦向多進式

閩北・閩東に多く見られる典型的福建民居である。厅堂と天井を中軸線上に展開し奥行方向にのみ進む縦向多進式は密集する市街地に適した形式である。

横向横屋式

中心軸の厅堂と天井の関係は同じであるが増大にともない横向に広がる住居形式であり比較的閩南閩西に多い。横に連なる横屋間の天井は多様であり巧みである。この形式は客家民居と関連性がある。

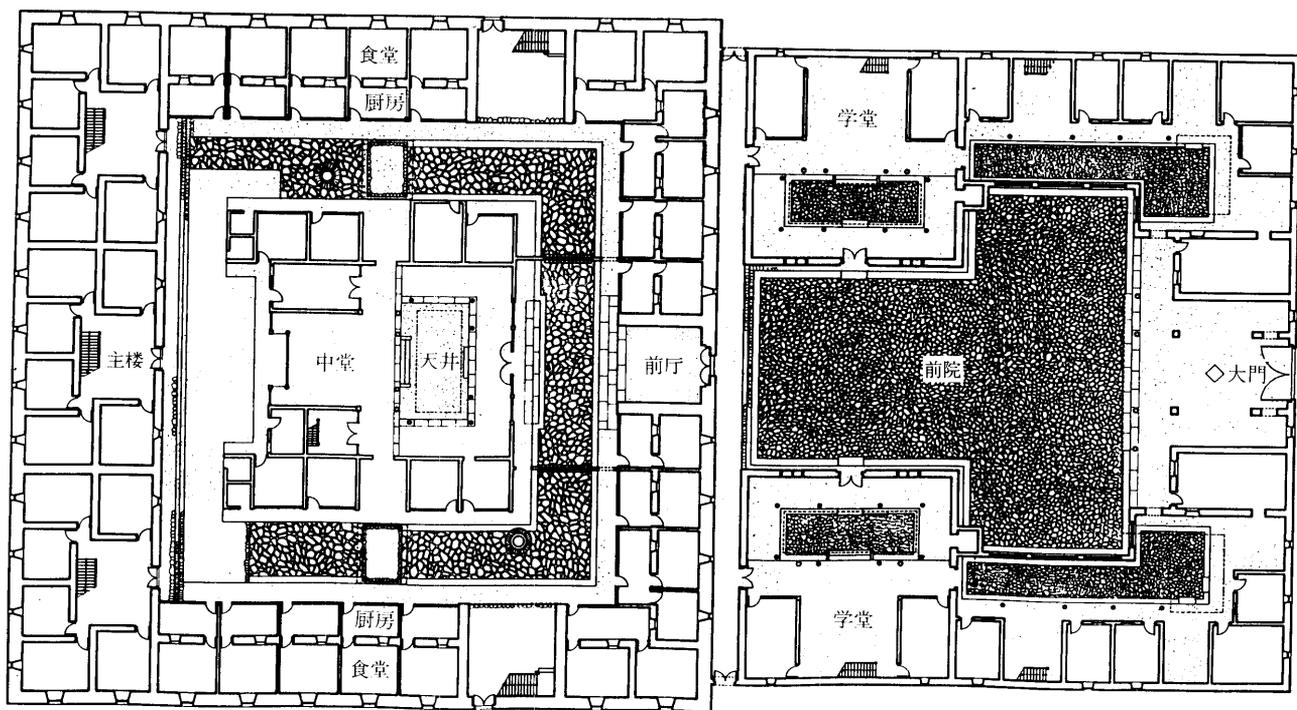
〈天井〉空間

福建民居の空間的中心ともいべき天井と大厅、前厅の〈天井〉空間について一部を図示する。

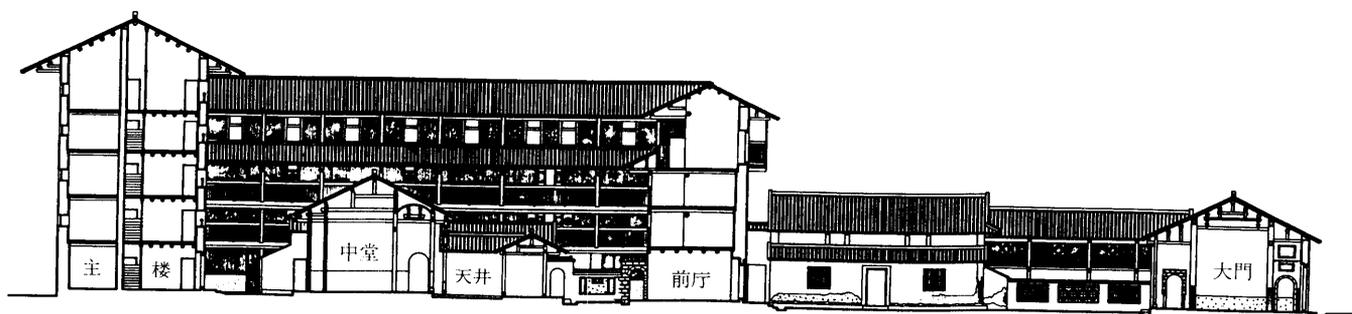
客家民居

客家の特異な歴史と文化を反映して、住居もまた特有な形態をもつ巨大な集合住居である。多様な中国住居の中でも独自のものであり世界の住居と比較しても巨大な環形土楼はユニークな存在といえることができる。

客家民居は広東・江西・福建の三省境地域に集中しているが、この研究では福建省龍岩地区永定県および龍溪地区南靖県に所在する住居を対象としている。調査した客家民居は比較的平地に広く分布する群体住居、起伏の多い山間地に見られる土楼住居、および斜面土楼の三種に分けられる。



〈遺經樓〉一階平面図 1 : 500



〈遺經樓〉断面図 1 : 500

群体住居

福建民居の横向横屋式に関連をもつ客家民居の一類型と見られる。平面配置は堂屋・横屋・囲屋という三種の基本単位の組合せにより状況に対応する自在な方式をもっている。その単純なものから名称のみを示すと次のような住居が所在するといわれる。

三堂式・四堂式・三横式・二堂一横式・三堂一横式・三堂二横式・六堂二横式・三堂四横式・三堂二横加倒座式・三堂二横加囲屋式・三堂四横加囲屋式・最大のものには五堂六横二囲屋式

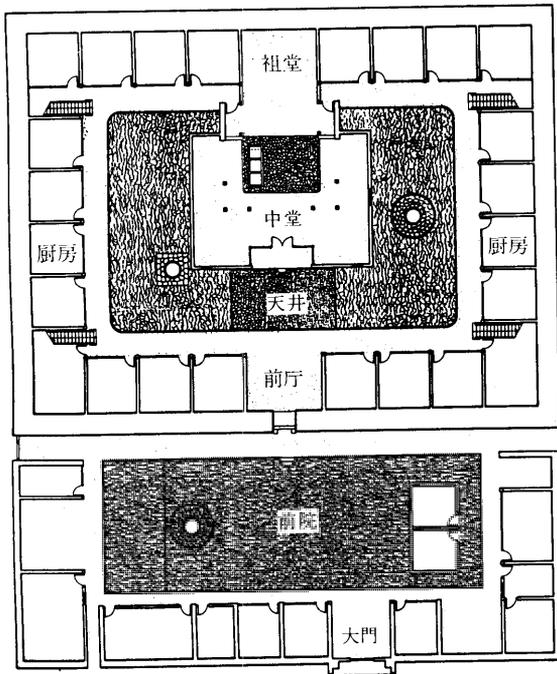
群体住居の基本型とみなされる三堂二横式について説明する。三堂式とは中軸線上において大門を入るとそれぞれ横に三室ならぶ下堂・中堂・上堂の三堂を連らねその間に天井を配するものである。中軸線上に建物前面に農作業用の広場＝禾坪さらに養魚地を配し、建物背面に涼院を設ける。禾坪をかこむ建物を倒座、涼院をかこむ建物を囲屋という。三堂は縦向多進式のように中軸線上に延びて五堂になることもある。中軸線上には家族全体が共有する堂屋と家長の住居を位置させるのに対して、

家族の居住部分を横屋と称して横方向に展開する。三堂に対し左右一棟づつものものを三堂二横式、二棟づつは三堂四横式になる。横屋の間には縦長の天井（横坪）を配する。厕所豚舎などの付属屋はさらに外に置く。

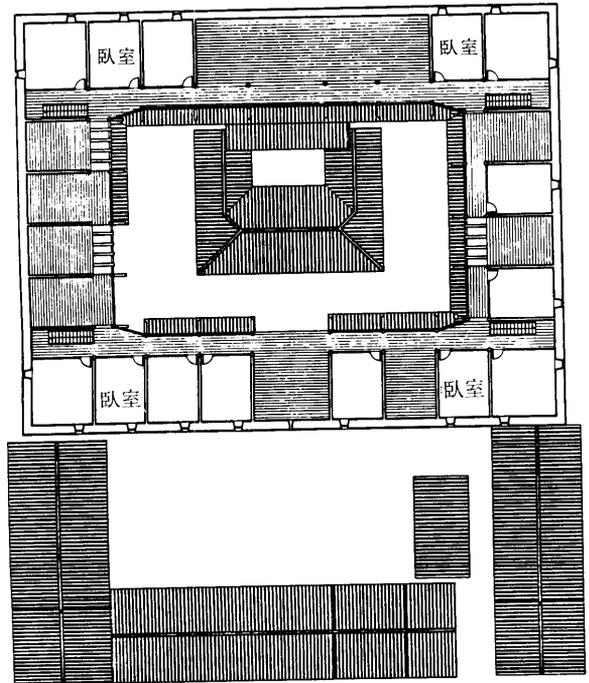
三堂二横式の客家民居は山の斜面が平地に接する所に建てるのが良しとされる。背後を高い塀や建物のある涼院で守り前面に池を掘り水を配する形式は〈風水〉にもとづく典型的形態であり、客家の居住地に多く見られる群体住居の基本形である。今回実測調査を行った〈大夫第〉はその好例である。

三堂には正三堂と仮三堂がある。正三堂とは禾坪の周辺に建物（主に学堂）や高い塀をつくり大門を外に設けるものであり、仮三堂は何もつくらず大門を直接下堂に設けるものである。仮三堂は略式であるが経済的理由でこれを採用するものが多い。土楼であるが〈遺經樓〉〈永隆昌樓〉は正三堂であり、〈大夫第〉は仮三堂である。

下堂・中堂・上堂または主楼の各堂屋の間に天井があり、天井の両側は通路または廊屋であり前後の堂屋を結ぶ。



〈和貴楼〉一階平面図 1 : 500



〈和貴楼〉五階平面図 1 : 500



〈和貴楼〉断面図 1 : 500

大門を入ると下堂中央の部屋は大きい、前厅・門厅ともいう。正面天井側に屏門が設けられ直接中堂は見えない。普段その両傍を通行するが正式行事のとき屏門の板壁は取り外されそこを通る。

中堂は三間であり中央の一室を中堂・正堂という。両側の部屋を客厅花・厅と称する。住宅の正中すなわち中心的存在である。中堂は広く高く前面は天井に対して開かれ明るい、後方に屏門を設け左右に扉がある。中央板壁の前に道具飾りを行い祖堂として使われる。

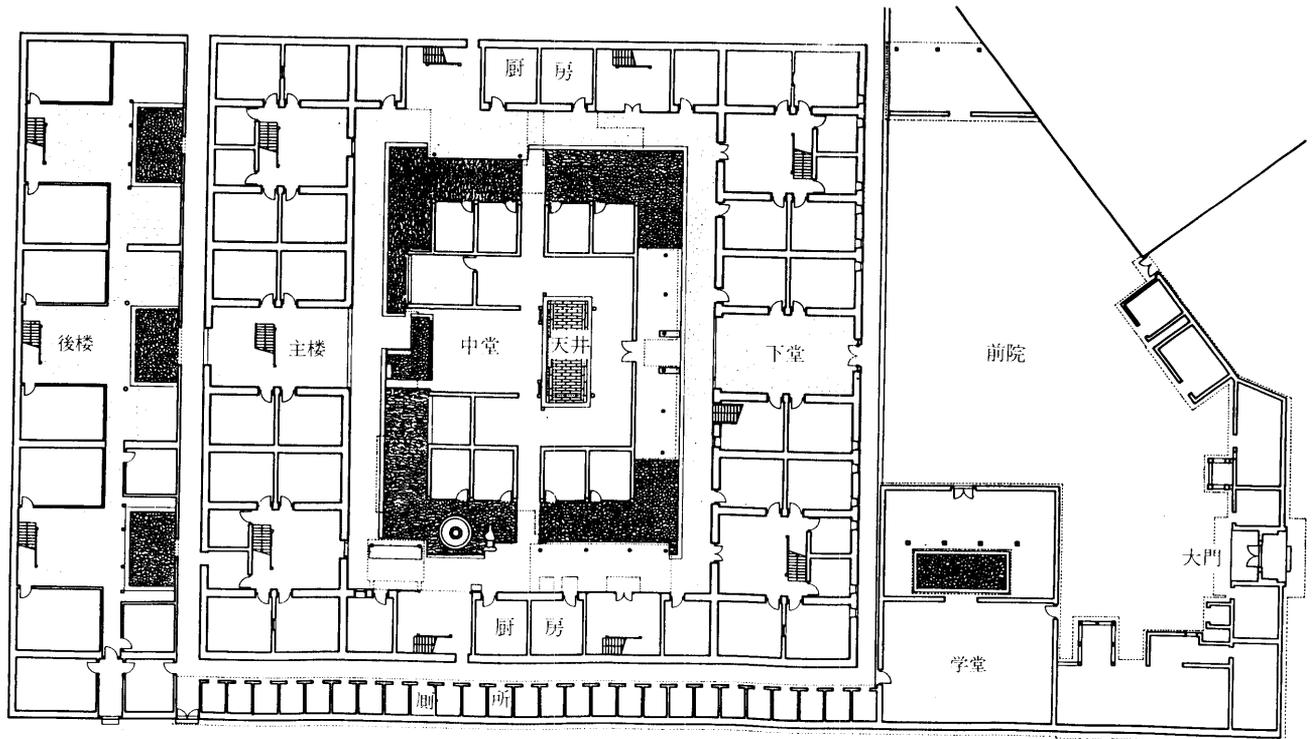
上堂は主楼・後楼ともいわれ三層から六層ほどの高樓とするのが一般である。家長など主要家屋の居室棟であるが、中堂との間の天井を前にして全住宅の最後部に聳え立つ形式は三堂二横式住居の特色である。主楼一階内部、中央の部屋を門厅とし階段を設け貯蔵室とする。二階以上を臥室とし最上階に展望の良い開口部をもつ。一般に主楼の窓は小さく出入口はただ一つ、壁は厚く特別堅固に造られている。

横屋は小室を数多く一列に連ねるもの、住居単位を三つ四つ並べるなど一定しない。ただ建物の高さは最前

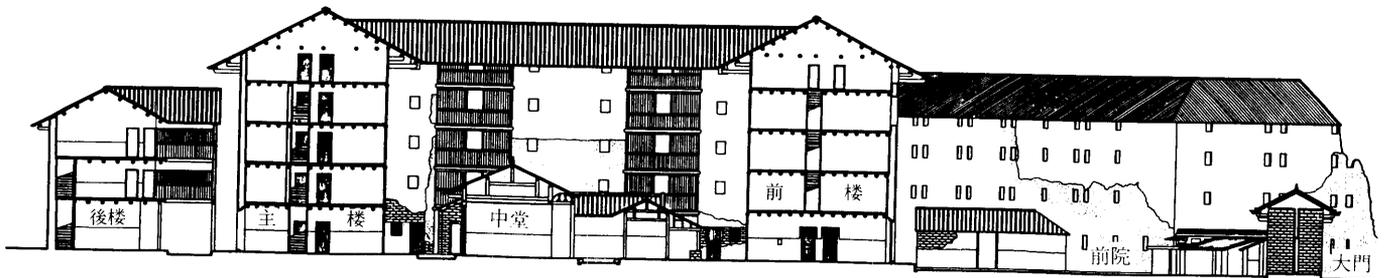
部一層、中間は層を重ね後部は三四層に達するように階段状をなすのが一般である。そして主楼の高層に接する。横屋の前、三堂との間の天井は横坪とも称する、細長い通路状の中庭であり前部に小門をもつ。通風にも役立っている。横屋一階は厨房・工作室・倉庫などに使われ二階以上は若い家族が起居することが多い。

三堂二横式住居は、風水思想により山を背にし前に開けた土地をえらび斜面を利用することを基本条件にしている。加えて前が低く後が高い建物の外観は、中国古来の椅子〈太師椅〉のように堂々とした尊厳さを見せている。左右に対称性をもちながら前後に均衡をやぶり高まる外貌は水田と低山のひろがる遠望の中においても威圧感をあたえている。

三堂二横式を基本とする群体住居は客家民居の主体と思われる、とくに広東省梅県周辺には客家も多く住みこの住居形式が見られる。閩南の横向横屋式住居より大きく堅牢で他を圧するが、方形・環形土楼ほど城寨的ではない。またこれらは共通して〈風水〉により形成されていることは興味深い。



〈永隆昌楼〉一階平面図 1:500



〈永隆昌楼〉断面図 1:500

土楼住居

龍岩地区永定県周辺には、厚さ一米、高さ十数米、長さ数十米ほどの生土壁で囲んだ巨大な方形・環形土楼が存在している。その数、百以上というが詳かにしない。客家の大家族による集団労働・共同防衛という社会条件と風水思想によりこのような特異な形態が生み出されたものであろうが客家独自の住居形式であり、とくに永定県周辺に集中していると思われる。

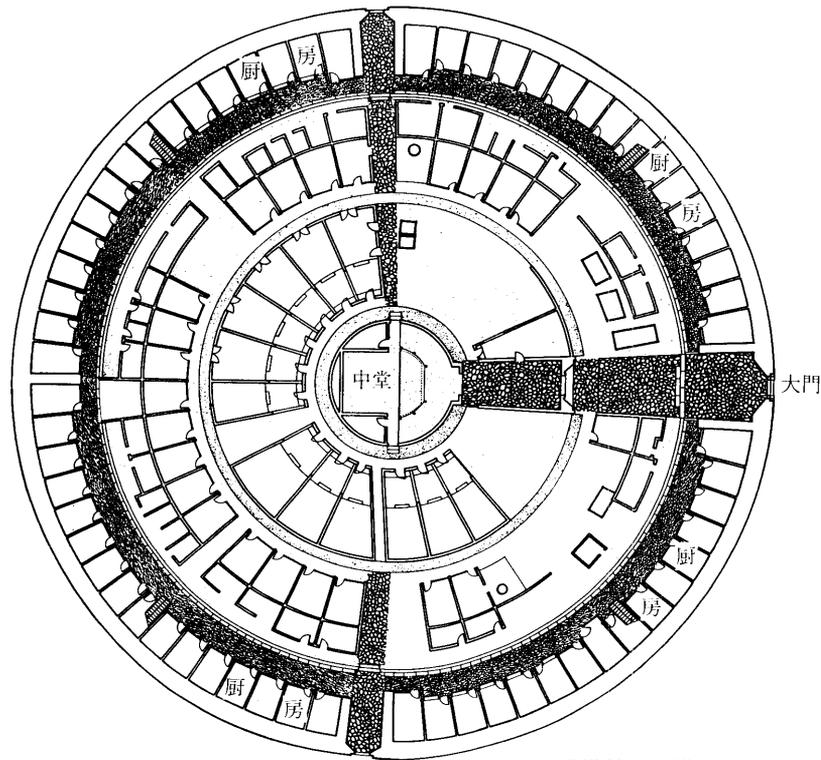
方形土楼

平面は一辺30~50米の正方形あるいはやや横長の整形をなし、その外周を厚さ1米ほどの生土壁で囲む。大型の場合住居単位を連らねた高層の土楼を外壁に沿って□字型に設けるのは〈遺経楼〉〈永隆昌楼〉である。小型の場合〈和貴楼〉のように小室群と回廊(走馬廊ともいう)を木構造により3~4層重ねて外壁に沿ってやはり□字型に配する。いづれも外壁に沿う住居部分に囲まれた方形の大きく明るい天井が内包される。その中庭の中央に一層の祖堂と小天井その他の諸室などをまとめた建物を

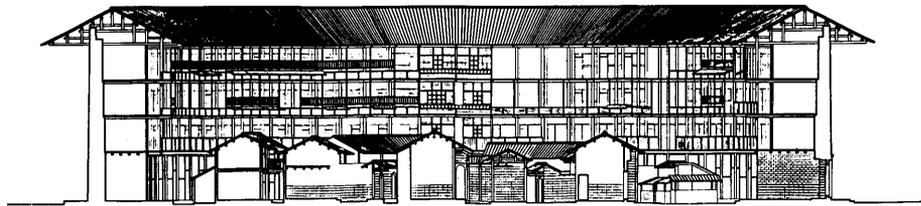
軸線上に置き大門に対する。逆にいえば大門を入った正面に中堂・祖堂を全住宅の中心として位置づけ、そこから同心状に天井、居住棟が広がり厚い土壁で囲まれている。四周居住部分の一階は厨房、食堂、二階は食料庫、三階以上を居室とする。したがって中堂・天井をふくめ地上面は家族全体の場であり上階部分に個の領域がある。大型方形土楼の場合、〈遺経楼〉〈永隆昌楼〉のように大門前面に広場を設けその周囲に建物と塀を廻らす正三堂式が見られる。子弟の教育のために学堂を設置することが多い。また作業舎、倉庫、動物舎など付属建物を置くこともある。方形土楼の外観は通常前面が低く後が高い。しかし四周同じ高さのものもある。四層前後であり軒の出の深い瓦屋根をのせる。一階に窓はなく上階のものも小さい。その外観は正に城寨である。

環形土楼

円形平面の土楼を円形土楼と称してもいるが、多くは二重三重の同心円をなして建物をつくるので環形土楼と呼ぶことにする。環形土楼も方形土楼と同じように厚い



〈承啓楼〉一階平面図 1 : 600



〈承啓楼〉断面図 1 : 600

生土の外壁により囲まれた直径30~50米の大きな円形をなしている。外壁に沿って数多くの小室が連なり前面に円形回廊が続く。居室と走馬廊は木構造とし外壁に倚る。この木造3~4層の建物は円筒状をなして内部に大きく明るい天井を包んでいる。

大きい天井の中心に中軸をもつ円形建物がある。小天井をもつ祖堂である。正面に大門があり直交して左右に通路がある。大型環形土楼では中心の円形建物の外壁に沿って客厅その他付属建物が二重三重の同心円をなして広がる。同心円状の建物の高さは中心の祖堂は一層であり外側に二層最外縁部の居住部分で四~五層と高くなる。居室や走馬廊は大きい天井に面して採光・通風は充分満たされている。

環形土楼の使われ方は地上面が共有であり上階が個の部分である点では方形土楼と変わらない。しかし外外部の個室は全く同形平等であり、中国民居に一般に見られる身分による空間の序列は全く見られない。円形平面では部分の特化が考え難いと思われるが、なぜ環形土楼と方形土楼が隣り合って存在するのか不思議である。それ

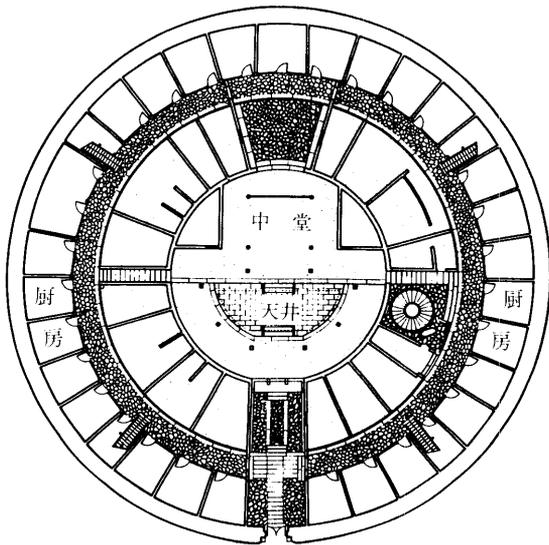
は風水であるという答しか得られなかったが客家民居として何らかの変貌があったと思えてならない。

したがって環形土楼の外観は同一高さの外壁に大きく輪形の瓦屋根がのる。黄土色の外壁、黒灰色の瓦屋根、点々と小さい窓の白い枠、環形土楼は山の緑と光る水田の中に突如舞い降りたUFOのように異様な風景を展開している。

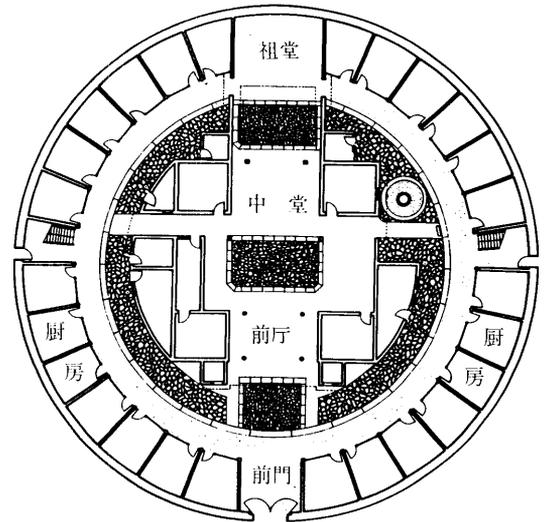
〈承啓楼〉は直径61米256室を有する最大の環形土楼〈荣昌楼〉は円形と方形の組合せが面白い〈懷遠楼〉は形態も整い保存も良い中型土楼である。

斜面土楼

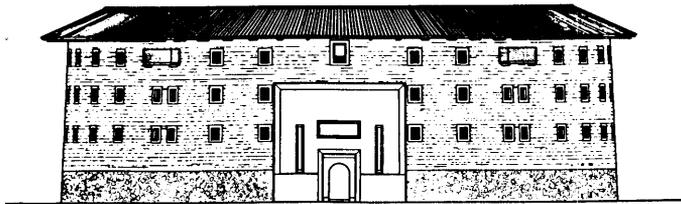
客家民居は形式的には群体住居、方形・環形土楼であるが、僅かな例外として斜面住居がある。川に臨んだ急斜面の段差のある敷地に横長な土楼をつくる。石積の擁壁の上に山側と側面のみ土楼とし川側には木造で明るく開ける。圧縮した方形土楼として中軸線上に祖堂を置くが大門はなく、入口は自ら側面になる。〈長源楼〉は川に面して眺望がよく気持ちよい構成をなしている。



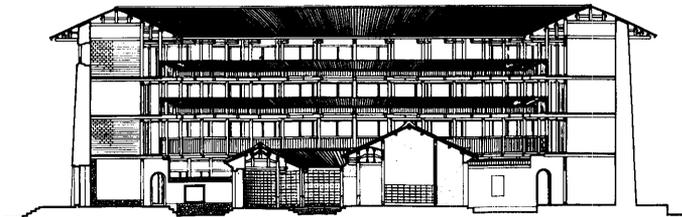
〈懷遠樓〉一階平面図 1 : 500



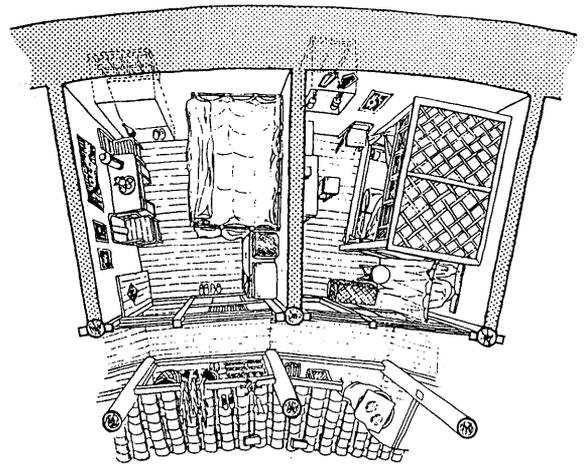
〈榮昌樓〉一階平面図 1 : 500



〈懷遠樓〉立面図 1 : 500



〈懷遠樓〉断面図 1 : 500



環形土樓・臥室と走馬廊

客家民居の築造構成

土楼住居は文字通り生土壁の建築である。しかし客家民居のように生土壁を使って大規模な土楼を築いている範囲は福建省の中でも限られた地域にすぎない。他の地区では様々な材料で民居が作られている。石、磚、土、木、焼物、竹等さまざまな地産の材料がまさに動員され工夫され用いられ、その中から地域特有な構造、形態や色彩をもった家屋が形成されてきた。客家土楼は土と木が採用された建築である。

生土という言葉は広く用いられるが、福建省の生土建築では土を加工しない版築壁のことであり、穴を掘って作るものではなく地面以上の建築を意味している。

生土建築の材質と構法を次のように分類している。

- ① 版(夯)築壁——生土(黄土)を木型(型枠)に詰めそれを突き固めて作る壁、さらに
 - i) 瓦礫土——古い家屋を壊してその材料を利用したもの、町中に多い、粘着力があって永持ちする。
 - ii) 紅壤土——閩北に多く川砂利を入れる方法、壁内に層状に入れるもの、外側のみに入れるものあり。

iii) 三合土——閩東に多く〈金包銀〉の別名あり。石灰や砂(銀)を入れて土は金になる。土と砂、土と砂、石灰、土と石灰の組合せがある。壁の内部は土で外側だけ三合土で作る。

iv) 黄土——閩西、客家土楼のように普通の土を使う。

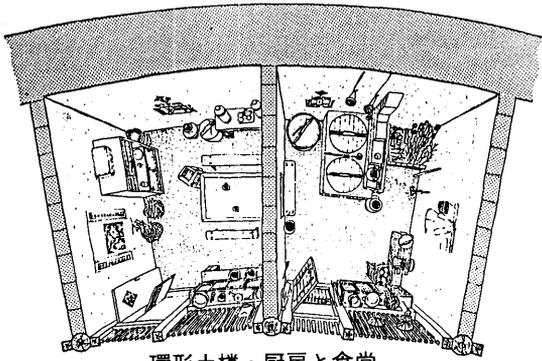
② 堆築壁——土の中にワラを多く入れ版築より水も多くする。壁に沿って土を並べ鍬で削る方法を挑牆という。

この方法は農民が好んで用いるが余り高い建物はできない。付属的な建物に使われる、持ちは良い。

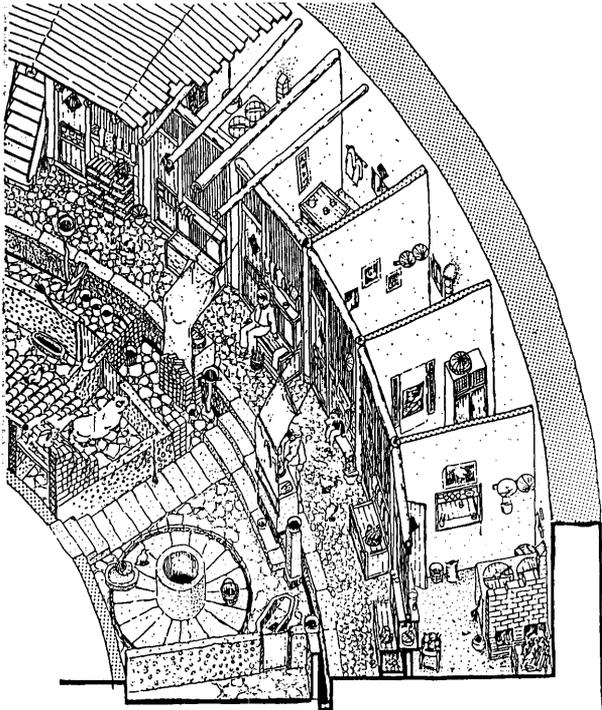
③ 土坯壁——レンガ造と同じ乾燥時間が短くてすむ。

生土壁は機能的に構造体または保護材に分けられる。木材が豊かな閩北では木構造が主体であり生土壁は保護材であるが、閩西の土楼では生土壁が構造体であるとともに木造も部分的に構造体である。

閩西の土楼住居が群居する地域は山地で温暖であり雨も多い。そして土と木に恵まれている。土の質は細かく粘性はあまり強くない粘土を産する。現地住民の経験に



環形土楼・厨房と食堂



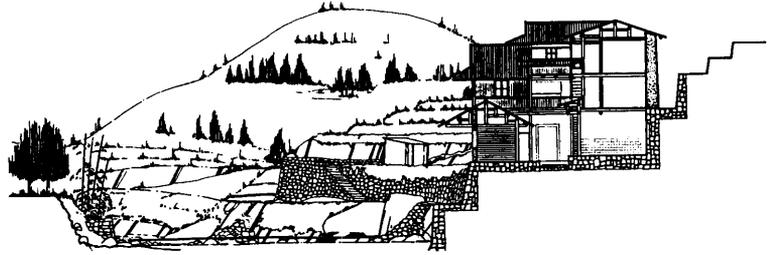
環形土楼・厨房と天井の生活

よれば土壁を築くのに適した土は握って固められ風化してから固まりを砕くとすぐ均質にくずれるものが多いらしい。一方、木材は松、杉、樟、楠などを産する。中でも杉が多い。客家土楼はこの豊富で良質な土と木を得て生み出された。土楼の厚さ一米程度、高さ十数米の巨大重厚な外壁はすべて版築の土壁として築き上げられている。環形土楼の外壁の場合、構造的補強と防火を兼ね階段や入口廻りを利用して一定間隔に外壁と直角方向の土壁が設けられている。外壁には窓は少ない。

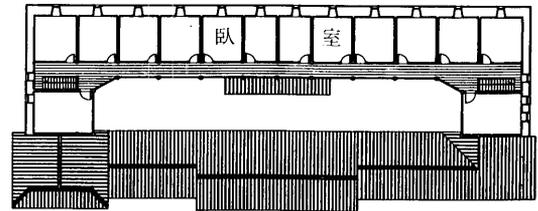
その生土による外壁の内側は、一転して四・五層の木構造に変化する。数多くの小房が並び、その前の走馬廊と呼ぶ回り廊下が巡っている。材料としては杉が多く、松も用いられている。生地そのまま使われ装飾はほとんどない。囲まれた天井からの通風・採光に配慮されている。

版築壁の作り方

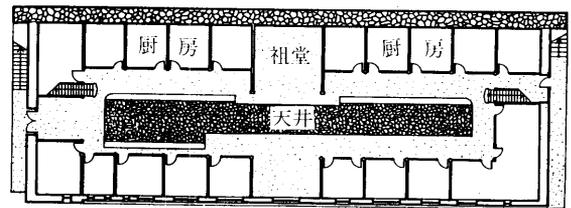
土楼住居の版築壁は、上に行くに従って壁の外側を少しづつ内側に傾斜していく。内側でも一層ごとに10cm程度段をつけて薄くなるように作ることが多い。



〈長源楼〉断面図 1 : 500



〈長源楼〉三階平面図 1 : 500



〈長源楼〉一階平面図 1 : 500



〈長源楼〉断面図 1 : 500

作り方はRC造と似ており木で型枠を作りそこに土を打ち込む。ただ一度に高く厚く長く作ることはできず、小さな単位ごとに段々に突き固めていく。版築の木枠は普通高さ40cm長さ150cm(壁のでき上りは120cm)厚さは壁厚によって枠を広げ調整できるようになっている。版築一段には5~10層の土を重ねている。各層の土ごとに2度たたき最後の層は3度たたいて固める。多くの場合枠板半分に土がつまったとき、その上に2~3の短い竹片を入れ、あと一層で終るとき直径4~8cmの長い竹管を数本入れる。もとより土壁ごとの緊結と強度を保つための処置である。土壁はかならず高さ一段づつ土楼の全周壁を回り、次の段に移るように進める。上下2段はできるだけ相互に重なりかみ合うように打つ。一段を右廻りに進むと次は左廻りに進めることもある。こうして緊密につくるので土壁全体は一度に作られたもののよう一体性を有している。

生土壁に門や窓をあける時は開口部の上端に直径約12cmの丸太を並べ補強する。門を作る場合はあらかじめ空洞を先につくっておくが、窓は壁を作ったあとで穴を

掘りあける場合が多い。

土質は粘らず疏ならず中程度が良いが、粘性の高い土には砂を入れ、粘性の少い土には他の土を混ぜて調整する。“新土滲老土”の方法が伝えられているが、地下から掘り出した未使用の土（多くは粘性が高い）に対してすでに用いた土を混ぜ合わせて用いれば、ひび割れやねじれ歪みが起らないと言われている。水の量は土をにぎると固まり少し乾いてから塊りが均等に砕ける程度が良いとされている。

壁面に灰土を塗って仕上げることは生土壁の美観と耐久性のためには良い。しかし経費が土壁を作る位に高いという。このため一般の土楼ではわづかに門や窓の周囲に限られて使われている。灰土は老工人の説明によると“三砂二灰一土”とそれに水を加えて作るという。

版築壁の施工は秋、冬の農閑期と雨が少い時期が利用される。農曆8～12月に多いといわれる。

施工は通常7人で行われる。2人が土を練り運ぶ、4人が2組になって土を積み突き固める。残り1人は補修する役にまわる。築造はかなり早く進むが土壁の初期強度は余り高くないので一日に三段しか打てない。石灰を少し入れれば雨が降っても比較的よく積むことができる。大きな土楼の築造には数年間かかるものが多い。生土壁は固ったあとは非常に堅牢で耐久性に富んでいる。永定県の客家土楼の中には清代雍正、乾隆年間のものもありすでに200年以上の歴史をもつものもあるという。

屋根

閩西では雨が多く台風も襲来する。生土壁を保護するためにも屋根は重要である。勾配は25°程度である。客家民居では棟の両端に動物像、四隅の軒先に筒状のものをつける以外装飾はない。反りもない。瓦は焼き固めた胡蝶瓦を用いる。比較的大きく少し彎曲した断面をもつ。椽は板状で幅10cm厚さ3cm程度であり、その上に瓦を“压七露三”の要領で葺き、軒先はすさを混ぜた石灰で封じ流れ落ちるのを防いでいる。

三堂二横式住居では入母屋が多い。方形・環形土楼の場合には切妻を廻らして閉じるが方形の端部に入母屋を組み入れる例が多い。軒の出は深い。3～4層では母屋間隔2つ分、5～6層では3つ分（約2m）はね出している。その場合には大梁を外壁の外に延ばして軒を受け構造を用いている。隅部は隅梁を用いず伸した母屋を交叉させて支持している。また深い軒の出を支持するため外壁に挿木梁を設け突出させることもある。この地方のきまりとして出の倍だけ壁体にかくすといわれる。こうして生まれた軒の出の深い屋根は土壁と対比して美しい。

研究報告書 内容

はじめに

I 客家について

- (1) 客家とは
- (2) 客家遷移の経過と居住地・人口について
- (3) 客家居住地の自然環境
- (4) 客家の家族制度
- (5) 客家人の食事
- (6) 客家人の服装
- (7) 客家の特性

II 福建民居の概要

- (1) 福建省の地域的区分と住居形式
- (2) 福建民居の伝統的特性（対称的配置・天井空間）

III 客家民居

- (1) 群体住居（群体住居・三堂二構式住居・その使われ方・その外観・大夫第）
- (2) 土楼住居（方形土楼・環形土楼・土楼住居の外観・遺経楼・永隆昌楼・和貴楼・榮昌楼・懷遠楼・承啓楼）
- (3) 斜面土楼（長源楼）

IV 客家民居の生活構成

（集と個の領域・院子・厨房と食堂・臥室と禾倉）

V 客家民居の空間構成

- (1) 環境との調和の原理（客家の風土と風水）
- (2) 民居の空間構成（民居構成の特徴・民居の平面構成の秩序・民居の断面構成の工夫）

VI 客家民居の築造構成

- (1) 民居の素材と構造
- (2) 各部の構成（基礎・壁の足元と腰壁・牆壁・床と土間・木造架構と走馬廊・屋根・開口部）

VII 客家民居のこれからの展望

事例 実測図面8例について

<研究組織>

主査	茂木計一郎	東京芸術大学建築科教授
委員	稲次敏郎	東京芸術大学デザイン科教授
	片山和俊	東京芸術大学建築科助手
	水野雅生	東海大学芸術学科教授
	木寺安彦	建築写真家
	田村俊明	東京芸術大学デザイン科助手
	堀啓二	東京芸術大学建築科助手
	横溝真	東京芸術大学建築科助手
	伊村達矢	東京芸術大学建築科大学院生
	小日向義明	東京芸術大学建築科大学院生
	山本浩貴	東京芸術大学建築科大学院生
	朱曉雲	東京芸術大学建築科大学院生